

アメリカの人類学から学ぶもの

著者	桑山 敬己
雑誌名	国立民族学博物館研究報告
巻	31
号	1
ページ	27-56
発行年	2006-09-29
URL	http://doi.org/10.15021/00003971

アメリカの人類学から学ぶもの

桑山敬己*

Lessons from American Anthropology

Takami Kuwayama

This article presents my observations of American anthropology, based on my 11 years of stay in the United States as a foreign student and later as a professor. It provides descriptive accounts of the ways anthropology is actually practiced in America. As such, it may be considered an attempt at an ‘ethnography of anthropology.’

The opening chapter explains my background, both academic and personal, and the reasons why I returned to Japan even after becoming a permanent resident of the United States. The second chapter emphasizes the importance of putting America in a relative perspective, thereby regarding it as representing only one tradition out of many possibilities, despite the country’s superpower status. This viewpoint is applied in the third chapter, which analyzes the development of American anthropology by comparing it with that of Great Britain. The fourth chapter presents my impressions of some of the most influential American anthropologists by way of anecdotes. These illustrate the personal, rather than academic, aspects of American scholarship. The fifth chapter explores social factors in the academic culture of the United States, particularly the oscillation between obedience to authority and defiance thereof. The sixth chapter compares Japanese and American traditions of scholarship, and points out that Japan’s strength lies in its versatility, which compensates for its lack of depth. In the seventh chapter are discussed some of the problems with which non-Western students are faced when studying their own culture with American or British professors. The last chapter defines

* 北海道大学大学院文学研究科歴史文化論講座

Key Words : American cultural anthropology, British social anthropology, academic traditions in Japan and the United States, world system of anthropology

キーワード : アメリカ文化人類学, イギリス社会人類学, 日米の字間的伝統, 人類学の世界システム

Japan as peripheral to the ‘academic world system.’ I conclude with a plea to the next generation of Japanese anthropologists that they should improve Japan’s international standing by conducting world-class research.

1 はじめに	5 アメリカ的学問の周辺
2 超大国アメリカの相対化	6 日本の学問の再評価
3 アメリカ人類学の相対化	7 アメリカ留学と日本研究
4 アメリカ文化人類学の歴史と動向	8 若い日本の人類学者へのメッセージ

1. はじめに

最初にアメリカとの関わりについて述べておきたい。私は東京外国語大学の出身で、学部（英米語学科）時代は言語と文化に関心があったが、大学院は当時できたばかりの地域研究科に進み、そこでアメリカ研究を専攻した。だが、アメリカを学べば学ぶほど他人事のような気がして、アメリカを鏡として自文化の日本を学びたいと思うようになった。しかし当時、日本研究という分野は今日ほど認知されていなかったし、また東京外国語大学には博士課程がなかったので、フルブライト奨学生の試験を受けてみたところ、まぐれで受かってしまった。幸運にも、私は1982年秋からアメリカで人類学を本格的に学ぶ機会を得たのである。留学先はカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）であった¹⁾。

アメリカには夫婦と猫1匹で渡った。渡米して間もなくすると、まったく予期していない出来事が起きた。妻が妊娠したのである。UCLAでの最初の年が終わる頃、私は期せずして1児（男子）の父親になった。そして、この子が自動的にアメリカ国籍を取得して、小学校4年生までアメリカで過ごしたので、我が家はどっぴりアメリカにつかることになった。1986年には9ヶ月ほど岡山の農村でフィールドワークを行ない、それをもとにして *The Japanese Conception of Self: The Dynamics of Autonomy and Heteronomy*（日本人の自己概念：自律と他律の力学）という博士論文を仕上げ、1989年度末に提出して受理された。もっと早く提出しようと思えばできたのだが、フルブライト奨学生に課されたビザ上の制約があったため、アメリカで就職できるまで待っていたのである。数年間必死でポジションを探し、やっと射止めたのがヴァージニア

州リッチモンド市にある Virginia Commonwealth University (VCU) であった。応募者は 100 人を越えていたという。

1989 年夏、我が家は住み慣れたロサンゼルスを離れ、自然および社会環境のまったく違うリッチモンドで新たな生活を始めることになった。その直前に長男は幼稚園を卒業し、長女は長男と同じサンタモニカの病院で生まれた。伝説的ロック歌手エルヴィス・プレスリーの孫と同じ新生児棟だった。リッチモンドに移ってすぐ、私は弁護士を通して永住権申請の手続きに入り、とても人権尊重の国とは思えないほどの「試練」に耐え（警察署内での指紋押捺、自費でのエイズ検査、非ナチス党员および非共産党员の宣言、最終面接では椅子もない廊下で何時間も延々と待たせるなど）、やっとのことでグリーンカード（永住権証）を手に入れた。交付の知らせを受けたのは 1991 年 12 月 24 日で、それは最高のクリスマスプレゼントであったが、不思議なことに、私はその頃から本当にアメリカに骨を埋めたいのか、自問自答するようになった。

理由は大きく分けて 2 つある。ひとつは学問的なもので、アメリカ人とは文化的背景の違う自分が、はたして同じ土俵で異文化（特に自文化の日本）について語れるものだろうか、疑問を感じ始めたからである。たとえば、日本のことであれアメリカのことであれ、私が面白いと思って授業で一生懸命説明した事柄に、アメリカ人の学生はほとんど反応を示さなかったり、その逆のことがよくあったりした。もちろん、同様なことは既に大学院生時代に経験済みだったが、教師として教室で大勢の学生の前に立つと、反応が集合的なのでインパクトが違うのである²⁾。こうした差は普段の講義だけではなく、論文執筆の際にも微妙な影響を及ぼす。一例をあげると、コンドー（Dorinne Kondo）の *Crafting Selves*（1990）は、東京下町の商店の生活を日系 3 世の目で描いたもので、ポストモダンの民族誌の模範と賞賛され今日でも議論されているが、コンドーのナラティブは私には単なる「世間話」としか思えなかった。この点については、拙著 *Native Anthropology*（2004 年）で「民族誌の三者構造」（書く者・描かれる者・読む者）という観点から論じたが、通常、民族誌は自文化の成員を読者に想定しているので、読者の心を読めるかどうか成否の鍵を握るのである。

もうひとつの理由は家族に関するものである。長女が保育園に通い始めてしばらくしたある日、ふと気がついてみると長男と英語で喋っていた。予想していたとはいえ、それまで家庭内ではなんとか日本語を使っていた（つまりアメリカの「侵入」を水際で防いでいた）のだが、子供同士が英語で話し始めると、アメリカが「土足」で寝室にまで入ってくるような気がして、多少のショックを受けた。実は、長男とは既

に日本語で話すことが難しくなっていたし、日本的な考え方ではものが進まないようになっていた³⁾。だから、家庭内での英語の使用は、我が家のアメリカ化のひとつの象徴的出来事にすぎないが、私には自分の言葉や文化を捨ててまでアメリカに残る気はなかった。と同時に、アメリカ国籍を持つ2人の子供がアメリカ人として育つなか、親がいつまでも日本にこだわっているのは、子供の教育に悪影響を及ぼすと考え始めていたのも事実である。そんなとき、とある人から東京の私立大学に就職口があるという話を聞いたので、考え抜いた末、私は11年間のアメリカ生活に終止符をうち、日本で再出発することにした。1993年秋のことであった。

以下、日本人の目で見えたアメリカの人類学について述べるが、その前にひとつ断っておくと、本稿には個人的なエピソードがかなり含まれている。それは裏話を暴露するためではなく、日本にいれば活字でしか接しないアメリカの学問、特に人類学の実践的側面を語ることによって、「人類学の民族誌」とでもいうべき材料を提供するためである。

2. 超大国アメリカの相対化

最初に「超大国アメリカとどのように関わるか」という一般の問題について考えてみたい。学問にせよ何にせよ、アメリカ抜きに今日の世界を語ることは難しい。だから、アメリカとどのように付き合うかは、世界中の国にとって大問題である。ただ、日本には特殊事情がひとつあって、それは第2次世界大戦でアメリカを中心とする連合軍に敗れたという事実である。UCLA にいたとき、「アメリカを相手にして、アジアの日本がよくあそこまで戦った」などという「褒め言葉」を、中南米の留学生から聞いたことがあるが、日本人の集合的記憶としては、アメリカに徹底的に叩きのめされたという意識のほうがはるかに大きい。日本経済が好調だった1980年代にはアメリカが債務国に転落し、日米の地位が一瞬逆転したかに見えたが、90年代のバブル経済崩壊以降、自信喪失状態の日本を尻目に、アメリカは世界唯一の超大国として復活した。

こうしたアメリカに対して、日本人の間には2つの正反対のリアクションがあるようだ。ひとつは服従的とも思われる親米的な態度で、一部の政治家に典型的に見られる。彼らの言動を観察すると、日本の国益を守るためにアメリカとパートナーシップをくむというより、歩調を合わせることにそのものに価値を見出しているような印象を受ける。つまり、独立国としての戦略的発想が欠如しているのだ。もうひとつはその

逆で、嫌米・反米的な態度である。これは意外にも若い人に多い。たとえば2005年度前期、北海道大学の全学（旧教養課程）の授業で1年生に聞いたところ、30人ほどの受講生のうち約半数がアメリカに対して嫌悪感または反感を持っていた。最大の理由は「独善的」というものだったが、これには9.11以降のアメリカの外交、特にイラク戦争が関係しているようだ。そして、留学するならアメリカよりヨーロッパ、あるいはアジアを希望するという学生が多かった。私が大学生の頃はアメリカが断トツの人気だったので、隔世の感がした。

多くの識者が指摘するように、この2つの態度はどちらも極端である。服従的親米論は日本の主体性（たとえ体面だけでも）を損なっているし、嫌米・反米論はアメリカ抜きで世界は進まないという現実と向き合っていない。言葉は悪いが、そこに「ガキ大将」がいるなら、それとどのように付き合って自分の利益を確保するかを考えるのが、大人の道理だろう。アメリカは超大国だが（最近では隣の準超大国・中国の動きも気になる日本人が多いのだが）、ひとつのやり方、ひとつの伝統を持った国であって、そこには長所と短所がある。きわめて当然のことだが、こうした明確な意識を持ってアメリカと関わる姿勢、つまり国際社会におけるアメリカの相対化が、今日の日本人には特に必要のように思われる。

3. アメリカ人類学の相対化

では学問の場で、特に人類学の世界で、どのようにすればアメリカを相対化できるだろうか。いろいろ経験した結果、私は、日本とは歴史的にかけ離れているがアメリカとは近く、しかし深層ではアメリカとも異なる存在を視野に入れて考えればよい、と考えるようになった。つまり、西ヨーロッパ、特にアメリカとは兄弟関係にあるイギリスと比較すると、アメリカをかなり相対化できると思う。冒頭で述べた「学問の場」とは、単に書かれたもの（著作）を意味するのではなく、それを取り巻く環境全体——高等教育制度、大学教員の雇用および評価の制度、政府による研究補助のあり方、教授と学生の人間関係、建物やキャンパスの作りなど、大学生活に関するありとあらゆるもの——つまり「学問文化」を意味している。

以下、いくつかのエピソードを交えながら、私のイギリス体験について述べる。私が初めてイギリスを訪れたのは1992年春のことであった。当時、まだVCUで教えていたが、オックスフォード大学が人類学の分野で日本研究者を公募しており、たまたま応募したところ最終面接まで残ったので、2日間にわたる面接を受けに行ったの

である。ファイナリストは私を含めて5人だった。もう時効だろうから一部実名を挙げると、イギリスからはグッドマン (Roger Goodman), ヘンドリー (Joy Hendry), イギリスで学位を取った日本人女性の3名で、アメリカからは日本人の私とアメリカ人女性の2名であった。今から考えると、実績の少なかった私をなぜ面接にまで呼んだか不思議だが、恐らく本命はグッドマンとヘンドリー (ともにオックスフォード大学出身) だったであろう。当時、業績そのものはヘンドリーが上だったが、結局グッドマンが選ばれた。さまざまな要素を検討した結果だと思われる。

応募には失敗したが、オックスフォードでの経験は、それまでアメリカ一辺倒だった私の意識を大きく変えてくれた。特に印象的だったのは面接 (job interview) のやり方である。アメリカの場合、面接は3日間ほどかけて行われるのが一般的で、もっとも重視されるのは模擬授業 (1時間ほど) である。この模擬授業には関係学部の教授や学生が出席して、研究者および教員としての資質が試される。ただし、社交というか儀礼の側面もあるので、その場で厳しい質問が連発されることはあまりない。そして、模擬授業の前後には、小さい大学なら学長、大きい大学なら学部長 (dean) クラスの管理者と面接があり、それに続いて当該学部・学科の教授陣と1対1の個別面談がある。この個別面談は1回30分ほどだが、「肌合い」を確かめるのが主な目的である。つまり、既存の教授陣とうまくやっていける人物かどうかを判断するのである。私がVCUの面接を受けたときは、5~6人の教授と個別面談があり、肉体的にも精神的にもかなり消耗した。さらに、訪問中は昼食会や晚餐会があり、候補者の人間性全体が観察対象となる。酒を飲んでいても気は抜けないので、あまり美味しい食事ではない。概して、アメリカにおける新任教員雇用面接は人間的要素の比重が高く、お互いにniceであろうとする (アメリカでは男女ともにniceであることが大切だ)。

周知のように、アメリカにはtenure制度があり、assistant professorレベルで採用した新任教員が、一定期間 (通常5年ほど) に業績をあげられなかった場合、tenure (終身在職権) を与えない。そのためか、最初の就職時の研究業績は、重要だが決定的ではないというのが私の印象である。むしろ、面接の段階では「人間性」が重視されるようだ。事例をあげよう。VCUで新任教員採用のための委員を務めたときのことである。どういうわけか、最有力候補の1人だった女性の評判が、女性を含む教授陣の間で非常に悪く、選考は予想外に難航した。理由を学部の長老にそっと尋ねたところ、'Demeanor' (態度) の一言が返ってきた。つまり、態度が悪いというのである。たしかに、彼女は私が同席した昼食会でも「なれなれしく」、礼儀を欠いていたよう

に思う。結局、彼女は他の大学でポジションを見つけたので、VCUとしては自ら決定を下さずにすみ、内紛に発展する事態は避けられた。これがアメリカ南部の特徴なのか、それともアメリカ全体に共通するものなのか、私には分からない。ただ、ひとつ言えることは、アメリカの中流階級は（ほとんどの大学教師はこの階級である）、日本人が考えている以上に「礼儀にうるさい」ということである。なお順序が逆になったが、面接にまで進む応募者（ファイナリスト）は3人、多くても5人ほどである。人類学の場合、書類審査後の第1次面接は、通常アメリカ人類学会（American Anthropological Association）の年会の最中に、面接用のブースやホテルの一室で行なわれる。

イギリスの面接の仕方はアメリカとはまったく違った。私の経験はオックスフォード大学に限定されているし、オックスフォード大学とケンブリッジ大学（いわゆるOxbridge）は、他の大学とは違うと言われているので、その点は最初に断っておきたい。まず、アメリカではファイナリストを1週間に1人ずつ呼んで、お互いに顔を合わせないようにするが、イギリスでは全員を一時に招集することもある。次に、模擬授業はアメリカほど重視されない。私のときは20分ほどであった。持ち時間は事前に連絡を受けていたが、私はアメリカの前提で模擬授業に全力を注いだので、力の配分を間違えてしまった。さらに、これはOxbridgeに特有であろうが、晩餐会はhigh tableという非常に形式を重んじた会食で、たしか黒のガウンを着てcollege内の食堂で開催されたと記憶している。学寮長（warden）が節目に小槌（gavel）を打つ姿が面白かった。

以上にもまして、アメリカと決定的に違うところは、教授陣との面接である。前述のように、アメリカでは候補者との「肌合い」を確かめるために、教授が1対1で個人的に面談するのだが（もちろん状況によって差はある）、オックスフォード大学の場合は、全教授が集まった会議室に候補者が1人ずつ呼ばれ、具体的な質問を受けるのである。私の場合、席に座るやいなや「あなたの応募書類には○△と書いてあるが、それをもっと説明してほしい」で始まり、「あなたはアメリカで心理人類学を研究したようだが、個人と社会を二者択一しろと言われたら、どちらを取るか」「うちの大学では現地語の文献読解能力を重視している。あなたならどのような日本語の文献を学生に読ませるか」などなど、まったく予想していなかった質問を矢継ぎ早にされ（それも聞きなれない英語で）、私はたじろいでしまった。我に戻ったときに面接は終わっていたのが悔やまれるが、いまでもあのときの「詰問」の様子は鮮明に覚えている。イギリスとアメリカの学問文化の差を、身をもって知った瞬間であった。

2回目にイギリスに行ったのは1998年の春である。その頃、私はヘンドリーと既知の仲となっていて、彼女はその年の春学期（4月から6月）に勤め先の Oxford Brookes University から休暇（leave）をとることになっていた。そして、彼女の代わりに吉田禎吾氏（東京大学名誉教授）が日本文化の講義を担当しに行くはずだったが、吉田氏が急用で渡英できなくなったので、ヘンドリーと面識のある私が代役を務めることになった。その結果、私は思いがけなく3ヶ月間をオックスフォードで過ごしたのである⁴⁾。そのときのエピソードを2つ紹介したい。

ひとつは、ヘンドリーと産業革命の発祥地バーミンガムに行ったついでに、シェイクスピアの生地ストラットフォード・アポン・エイボン（Stratford-upon-Avon）を訪れたときのことである。ヘンドリーは見せたいものがあるからと言って、街角の小さな3階建ての家に私を連れて行った。間口が数メートルほどの、どちらかといえば粗末な家である。しかし、そこには看板がかかっていて、次のように書いてあった。‘Harvard House: The home of Katherine Rogers, mother of John Harvard, the founder of Harvard University’（ハーヴァード・ハウス：ハーヴァード大学創立者ジョン・ハーヴァードの母キャサリン・ロジャーズの家）。私はハーヴァードがロンドン生れの移民だったことを知らなかったので、一瞬あっけにとられたが、そのとき次のように思ったものである。なるほど、イギリスからアメリカを見ると、このように見えるのか、と。ハーヴァード大学といえば、言わずと知れた世界最高峰の大学で、日本では皇太子妃が通ったことでも知られている。だが、その創立者の母は、イギリスのこんな小さな片田舎の家に住んでいたのだ。ヘンドリーが何を伝えたかったか定かでない。しかし、私はこの一件を通じて「成金」としてのアメリカ——自分たちの国から出て行った人間がアメリカで成功して、いまでは大手を振って世界中を歩いているというイギリス人（ひいてはヨーロッパ人）の感情——について考えるようになった。

もうひとつのエピソードは、私が翻訳したヘンドリーの『社会人類学入門』（原題 *An Introduction to Social Anthropology*）にまつわるものである。渡英して間もなく、オックスフォード近辺の文化センターで、芦屋市の女人舞楽「原筈会」のメンバーが芸を披露することになったので、私はヘンドリーと一緒に見に行った。その帰り、生まれて初めてパブに寄ったとき（ヘンドリーが学生の頃、オックスフォード大学の人類学者は、よく学生を連れてパブに行ったという⁵⁾）、彼女から「社会人類学の教科書を書いたから読んでみない？」と聞かれた。私は二つ返事で引き受け、出来立ての原稿に目を通したところ、日本の事例がふんだんに使われているので、日本語に訳すことにした。翻訳には2年かかったが、その間、私はイギリス社会人類学とアメリカ

文化人類学の差について深く考えさせられた。

今日、両者の間に際立った差異は少ない。そのことは、イギリス社会人類学の牙城オックスフォード大学の人類学部（1937年、ラドクリフ＝ブラウン A. R. Radcliffe-Brown が教授に就任した際、Institute of Social Anthropology と命名）が、1990年の改組を機に Institute of Social and Cultural Anthropology と名称変更したことに象徴的に表されている。だが、フランス社会学に強く影響されたイギリス社会人類学と、ドイツのロマン主義的民族文化観を引き継いだボアズ（Franz Boas ユダヤ系でドイツからの移民）が作ったアメリカ文化人類学では、発展の歴史が違う。実際、1960年代くらいまでは、同じようなテーマを扱っても、かなりの差が英米間で見られた。そして、この差は『社会人類学入門』の前半部の構成と叙述に、明確に反映されているのである。

一例として「分類」を取り上げよう。序章に次ぐ第1章「世界を見る」で、ヘンドリーはまずハンカチの例を出している。日本のハンカチはヨーロッパのように鼻をかむものではなく、デザインをこらした贈答品として重宝されていると彼女は述べ、民族が違えば同じモノでも分類が違くと指摘している。添付写真のハンカチに、十二単の女官がプリントされているのはオリエンタリズムだろうが、ヘンドリーによれば分類法は民族（people）の世界観の基礎であり、それは社会化の過程で学習されるという。当たり前のように思われる生死の分類でさえ実は民族差があることを、リーンハート（Godfrey Lienhardt）の名著 *Divinity and Experience*（1961）に触れて明らかにし、分類に関するもっとも古典的な研究はデュルケム（Emile Durkheim）とモース（Marcel Mauss）の『人類と論理：分類の原初的諸形態』（邦訳1969年）であるとする。この著作の英語版 *Primitive Classification*（1963）には、翻訳者のニーダム（Rodney Needham）による長大な解説がついている。彼はオックスフォード大学でヘンドリーの指導教員であった。

さらに、第2章「嫌悪・禁断・絶句」で、ヘンドリーはタブーや穢れの問題を取り上げ、ダグラス（Mary Douglas）の『汚穢と禁忌』（原著1966年）に依拠して、民族の分類体系に基づく秩序を乱すもの、つまり「場違い」なものは不浄視されると述べている。この関連で日本人のウチとソトの区別を紹介し、ソトからウチに入るとき靴を脱ぐのは、日本ではほぼ絶対的な規則であると説明している。そして、ヘンドリーはリーチ（Edmund Leach）の言語研究に触れて、「リーチによれば、言語はグリッド（grid 碁盤目または方眼）に似ており、言葉は重要なカテゴリーをラベル化し、本来なら連続体を形成する社会的物理的環境を、独自の認識可能な事物に分類するのであ

る。タブー語はこうした分類体系を強化し、境界線上に位置する事物の認識を禁止することにより、混乱を避ける役割がある」(ヘンドリー 2002: 50)と述べている。

以上がヘンドリー経由のイギリス社会人類学の伝統だが、これがアメリカならどうだろうか。アメリカにはさまざまな学派があるので一般化しづらいが、まず分類そのものが民族の世界観の根底にあり、人類学の基本的問題だという認識は薄いと思う。少なくとも、デュルケムとモースの著作から始めることは考えにくい。拙稿「アメリカの文化人類学教科書の内容分析」(『国立民族学博物館研究報告』第25巻3号, 2001年)でも指摘したが、アメリカの教科書には宗教の章でさえデュルケムの名前が出ることは少ない⁶⁾。リーンハートやニーダムにいたっては認知度も低く、彼らの研究が言及されることは稀である。教科書は単に初心者向けの解説書ではなく、学界のコンセンサスを表すので(そうでなければ売れない)、これはアメリカの文化人類学全体に共通する傾向だと考えてよい。もっとも、ダグラスやリーチはよく知られており、前者の『汚穢と禁忌』や後者の『文化とコミュニケーション』(原著1976年)は、UCLAでも修士課程の必読書に掲げられていた。

そのリーチの言語に関する見解を先に引用したが、この文脈(つまり言語と認識の関係)で、アメリカ人がほぼ確実に言及するのはサピア(Edward Sapir)である。彼は同時代のベネディクト(Ruth Benedict)やミード(Margaret Mead)の存在に隠れがちだが、抜群の素質の持ち主だった。その一端は主著 *Selected Writings in Language, Culture, and Personality* (1985)に伺える。この本の中で彼は「言語は社会的道標である」と主張し、次のように述べている。「現実の世界とは、その大部分が集団の言語習慣に無意識のうちに積み重ねられたものである。まったく同じ社会的現実を表すほど類似した2つの言語は、この世に存在しない。異質の社会が住む世界は各々独自の世界であり、同じ世界に異なったラベルが付いたものではない。(中略)視覚、聴覚、その他すべての人間の経験は、特定の共同体の言語習慣が選択した解釈を基盤としている。(中略)言語は文化の象徴的道標である」(Sapir 1985: 162)。タブーの問題はサピアの視野に入ってなかったようだが、承知のように彼に師事したウォーフ(Benjamin Whorf)は『言語・思考・現実』(原著1956年)を著し、「サピアとウォーフの仮説」は言語人類学の主要なテーマとなった。1960年代、親族語彙や動植物の民俗語彙の分析を手がけて一世を風靡した認識人類学は、この流れを汲んでいるといつてよい。同じ弁別的特徴(distinctive feature)を分析原理としながら、フランスのレヴィ=ストロース(Claude Lévi-Strauss)の構造人類学と接点を持ったイギリスの象徴論とは対照的に、アメリカの認識人類学には心理学的志向が強かった。両者の間

に生産的な対話は生まれなかったように思う。

最後に、社会化とは分類の学習であるというヘンドリーの見解について、簡単に触れておこう。社会化はアメリカで独自の発展を遂げた心理人類学（別称「文化とパーソナリティ」）の中心的テーマで、日本人の社会化に関する人類学的研究は、この学派の貢献がもっとも大きい。だが、イギリス社会人類学は伝統的に心理学的アプローチを拒否しており、ヘンドリーも例外ではない。そこで、彼女は *Becoming Japanese* (1986) という日本人の社会化を扱った本で、ダグラスやリーチの象徴論を援用した。具体的には、人間を生物的存在から社会的存在へと変えるのが社会化の目的であり、社会は分類体系を共有する成員によって構築された象徴的秩序である、という立場をヘンドリーは打ち出したのである。そして、ウチとソトを中心とする日本人の象徴的秩序が、家庭と近隣と幼稚園という3つの場所で、どのように学習されるかを考察・分析した。アメリカではあまり注目されなかったようだが、心理人類学とはまったく違う切り口で社会化の問題に取り組んだ功績は大きい。少なくとも、UCLAで心理人類学を勉強した私にとって、この本は新たな世界を開いてくれた。

以上、個人的エピソードを交えて英米の人類学を比較したが、私の主張をまとめると、(1) 質量ともにアメリカは世界の人類学をリードしているが、(2) アメリカの文化人類学は世界で実践されている数多くの人類学的営みのひとつに過ぎず、(3) アメリカだけ見ていると多くのものを見逃してしまうので、(4) 歴史文化的に近い関係にある西ヨーロッパ（特にイギリス）を視野に入れると、アメリカを相対化することができ、(5) 知的可能性が広がる、ということである。当然、逆のことはイギリスの人類学者にも言えることであって、『社会人類学入門』の「訳者あとがき」では、アメリカの伝統に触れようとしないヘンドリーを牽制し、かつ各章の訳注ではその点を補っておいた。

4. アメリカ文化人類学の歴史と動向

それでは、アメリカの文化人類学には、どのような特徴があるのだろうか。本稿のもとになった研究会発表（日本文化人類学会近畿地区研究懇談会、2005年10月29日）では、このテーマについて時間を割いて説明したが、それは『事典現代のアメリカ』（大修館書店、2004年）に掲載された拙稿「文化人類学」を踏襲したものだ（桑山2004a）。ここでは紙幅の関係で、まず拙稿の構成を目次形式で示し、それに若干のコメントを加えるにとどめる。

- A 4分野アプローチ
- B アメリカ人類学の父：ボアズ
- C アメリカ人類学の初期：1920年代から40年代前半
- D アメリカ人類学の発展期〔前期〕：1940年代後半から60年代前半
 - 1 文化とパーソナリティ（心理人類学）
 - 2 機能主義
 - 3 新進化主義と文化生態学
- E アメリカ人類学の発展期〔後期〕：1960年代後半から80年代前半
 - 1 文化唯物論
 - 2 ポリティカル・エコノミー論
 - 3 認識人類学
 - 4 象徴人類学
 - 5 解釈人類学
- F アメリカ人類学の転換期：1980年代以降
- G ヨーロッパの影

以上の時代区分は、さまざまな文献や解説書を検討した結果、私がおっとも適当と考えたものである。まず、Aの「4分野アプローチ」(four-field approach)は、人間の総合科学を目指したアメリカ人類学に特徴的である。4分野とは生物(自然)人類学、考古学、社会・文化人類学、言語人類学のことで、学部と大学院の双方ですべてを必修科目としているところが多い。日本の留学生のほとんどは基礎教育を日本語で受けているので、専門用語の多い生物人類学にはてこずるだろう。UCLAでの最初の生物人類学の講義は「クロモソウム」を中心に進められたが、私は肝心の「クロモソウム」の意味が分からず、まったく授業についていけなかった。あとでスペルを適当に考えて辞書を引いたら、なんとchromosome(染色体)のことだった。運悪く非常にアサインメントの多い教授で、私は1週間に10時間から15時間、辞書と格闘しながら勉強する羽目になった。成績はお情けのB(最低及第点)だった。

Bのボアズについては、「アメリカ人類学の父」として高く評価する人と、単なる歴史上の人物として扱う人がいるようだ。私がUCLAで習った先生は一様にボアズを評価しており、特に*The Study of Culture* (1974)の著者ラングネス(L. L. Langness)は、cultureという言葉を複数形で最初に使ったのはボアズだということを強調していた。つまり、それまでcivilizationと同義で使われていたcultureを(その代表例が「広義の民族誌的意味における文化または文明とは」で始まるタイラー Edward Tylorの有

名な定義である), 特定の民族の生活様式として具体的かつ相対的にとらえたということである。ボアズの著作は日本語に1冊も翻訳されていないので, 日本では彼の思想について語られることは少ないが, 初期のアメリカ人類学, 特に文化相対主義の形成を考える際には, 決定的に重要な人物である。

Cの「アメリカ人類学の初期: 1920年代から40年代前半」でもっとも重要な人物は, ボアズの薫陶を受けたベネディクトとミードである。この2人については多くの解説があるので, ここではもう1人の重要人物クローバー (Alfred Kroeber) について一言述べておきたい。「アメリカ人類学の学部長 (dean)」と呼ばれたクローバーには, 'The Superorganic' (超有機体論) という有名な論文がある (1917年刊)。一般には「文化は個人を超越した存在である」という主張だと解釈されており, その意味ではデュルケムの社会観に近い。だが, 彼の論文をよく読むと, もうひとつ力点があることが分かる。それは, 文化を「有機体である個人」とは切り離して理解すべきだという主張で, 文化は「有機体/生物/人種」とは異なるという反人種主義の立場なのである。アメリカではよく 'nature or nurture' という表現を耳にする。「遺伝か環境か」「人種か教育か」という意味だが, 研究者が人種は社会的構築物であると声高に主張しても, 現実の日常生活でアメリカ人は人種に固執する。そして, 人種が知能を含む人間の質を決定すると考えている人は多く, ときには科学の名のもとに真実として正当化される。その典型が, 「アメリカの生活における知能と階級構造」という副題をつけたハーンスタイン (Richard Herrnstein) とミューレイ (Charles Murray) の著作 *The Bell Curve* (1995) である。アメリカの人類学者がボアズ以降, 一貫して社会的に獲得されるものとしての文化を強調してきた背景には, こうした事情がある。それは階級が人種に優先することのあるイギリスでは, なかなか実感として理解されないかもしれない⁷⁾。

Dの「アメリカ人類学の発展期 [前期]: 1940年代後半から60年代前半」に区分された心理人類学, 機能主義, 新進化主義と文化生態学については, 多言を要さない。私が留学したころのUCLAの教授陣は, 1960年代に博士号を取得した人が多かったので, この3つのいずれかに分類することができた。ただ, ラドクリフ=ブラウンの構造機能主義が, 本当にアメリカに浸透したかどうかについては多少疑問がある。たしかに, 彼は1930年代にシカゴ大学で教え, 『須恵村』(原著1939年)の著者エンブリー (John Embree) など優秀な研究者を育てた。だが, 構造機能主義的のモノグラフや民族誌の出版点数を調べてみたら, 予想外に少ないのではないかと思う。

Eの「アメリカ人類学の発展期 [後期]: 1960年代後半から80年代前半」につい

ては、UCLA のジョンソン (Allen Johnson) の言葉が思い出される。「アメリカの人類学でリーダーになろうと思ったら、独自の文化観を持たなければならない」。実際、ここに掲げた5つの学派は、独自の文化観を持った学者が打ち立てたものである。アメリカ人類学会の年会で彼らの言動を観察することができたので、以下に印象を記しておく。

まず、文化唯物論のハリス (Marvin Harris) は体も大柄で、彼が演壇に立つだけで他を圧倒する迫力があつた。彼の著作は一般的なものが多く、街角の書店ではよく目にしたが、理論そのもの (特に下部構造決定論) は支持されなかったためか、ハリスはいつも学会で論争的であつた。いっぽう、彼の教科書 (特に Harris and Johnson 2002) は一定の支持を受けて、多くの大学で使われている。ポリティカル・エコノミー論のウルフ (Eric Wolf) については、1989年に学会賞 (Distinguished Lecture Award) を受賞したときの記念講演が印象的だつた。何百人となく詰めかけた聴衆が一番沸いたのは、ウルフが「必要なのは解釈ではなく説明だ」と発言したときである。彼の言う「解釈」とはギアーツ (Clifford Geertz) の解釈学を、「説明」とは科学としての人類学の伝統を指していた。前述のラングネスは、「ギアーツは人類学の科学的伝統を壊して、文芸批評にしようとしている」と授業中よく批判していたので、そういう不満・批判が学界全体に強いことを実感した。認識人類学のグッドイナフ (Ward Goodenough) は、1回だけ学会で発表を聞いたことがあるが、話の内容より彼の端正なスーツ姿と冷静な語り口が印象に残っている。隙のない民俗語彙の成分分析には、うってつけの人だと思った。象徴人類学のターナー (Victor Turner) は、私が渡米した直後に亡くなったし、シュナイダー (David Schneider) に会う機会はずいになかった。解釈人類学のギアーツについては既に少し触れたが、彼の『文化の解釈学』(原著1973年)は1980年代前半には現在ほど聖典視されてなかった。むしろ、UCLA や VCU でよく聞いたのは、あの難解な英語についてである。「ドイツ語のはさみ構文みたいだ」「3回読まないと意味が分からない」という嘆きを学生と教授の双方から聞いて、やはりアメリカ人にとっても難しいのだろうと思った。

ここで、レヴィ=ストロースの構造主義について一言触れておきたい。イギリスではリーチやニーダムを通じて影響力を持ったレヴィ=ストロースだが、アメリカでは概してあまり理解されなかった。少なくとも UCLA では支持者が少なかった。その最大の原因は、彼の強い主知的傾向と実証性の乏しさに求められるが、そうしたもつともな理由以外にも、英語圏以外の学問から真剣に学ぼうという意欲が、アメリカの学者に欠けていることが原因ではないかと思う。たとえば、アメリカ人類学会の会長

を務めた UCLA の長老ゴールドシュミット (Walter Goldschmidt) は、「レヴィ=ストロースは理解不能」の一言で片付けていた。ラングネスにいたっては、もっと驚いたことがある。それは、彼からチュートリアル (UCLA では independent study と呼ばれていた) を受けたときのことである。レヴィ=ストロースについて話すことになっていた日、私がラングネスの研究室に入ると、彼はレヴィ=ストロースに関する解説書を読んでいて、そして笑みを浮かべながら、「これでやっと分かった」と言ったのである。私は一瞬耳を疑った。ラングネスは既に *The Study of Culture* でレヴィ=ストロースを解説していたからである。恐らく、彼は生半可な理解で解説を書いたか、または現物をあまり読まずに書いたか、あるいはその両方だったのだろう⁸⁾。

F の「アメリカ人類学の転機：1980年代以降」では、(1) 主として構造との対比による実践の重視、(2) オリエンタリズム批判およびポストモダニズムの思想的影響、(3) グローバリゼーションによる伝統的な文化観・民族観の見直し、(4) フェミニズムの台頭による男性中心主義の批判、という4つの観点から論じた。

2番目のオリエンタリズムとポストモダニズムについて、2つの印象深い出来事がある。第1はアメリカ人類学会の年会でのことである。1980年代後半から90年代前半にかけて、『オリエンタリズム』(原著1978年)、『文化を書く』(原著1986年)、『文化批判としての人類学』(原著1986年)などで示された新たな観点は、アメリカ人類学に徐々に浸透していった。ただ、アメリカの学問は重厚だが小回りがきかないので、一部のスター扱いされた研究者を除いて、それが何なのか見当がつかない人が多かったようだ。そのためか、「ポストモダニズム」と名のつく分科会には、好奇心と不安に駆られた人がどっと押し寄せた。そのうちのひとつには、学会長のラパポート (Roy Rappaport) のほか、ハリスやシェパー=ヒューズ (Nancy Scheper-Hughes) といった大物が顔をそろえた。参加予定のギアーツは病気で欠席した。ラパポートには、*Pigs for the Ancestors* (1967) という生態人類学の古典的著作があり、儀礼用の豚肉には部族の蛋白質不足を補う効果があるという論を、詳細なデータを使って展開した人物として知られている。その彼が、分科会で『文化を書く』を評価したものだから、ハリスは「ラパポートともあろう者が、そういうことを言うとは」と、まるで学生をたしなめるように公衆の面前で「論した」のである。ラパポートは困惑した顔つきで反論を試みたが、あまり説得力はなかった。その後、ポストモダニズムに関する賛否は、学会の会報 *Anthropology Newsletter* (現在は *Anthropology News* に改称) に、「人類学における科学」と題して1995年4月から翌年9月の長期にわたって掲載された。

もうひとつの出来事は、マーカス (George Marcus) が UCLA の人類学部で講演し

たときのことである。たしか1988年暮れか翌年春だったと思うが、話題の人物の来校とあって大勢の学生が集まった。話の内容は覚えてないが、講演直後にゴールドシュミットと2人で話したとき、彼は次のように言ったのである。「あの世代のアメリカ人は、いつも何かに反抗しているのだ」。最初はどういう意味か分からなかったが、後にこの言葉には多くの含蓄があることに気付いた。私にとってもっとも興味深いのは、ポストモダニストの社会的背景である。『文化を書く』周辺の流れは、思想的には全体性に対する部分性、絶対的真実に対する相対的真実、文化研究の内省性などによって説明できる。だが、マークス世代のリベラルなアメリカ人が、学生時代にどのような日々を送ったかを考えれば、彼らに共通した特徴が見えてくる。それは、政治的には市民権運動や反ヴェトナム戦争運動への参加であり、文化的にはカウンター・カルチャーの創造であり、思想的には禅やヨガといった非伝統的思想への傾斜である。つまり、彼らは世界的に荒れた60年代の学生だったのであり（クリフォード James Clifford は年齢的にやや若い）、学界に身を置いた後も既存の権威や秩序に対して挑戦し続けていたのだ。ゴールドシュミットは1995年の論文で次のように述べている。

「この一時的流行（ポストモダニズム）が、もっとも才能ある秀でた若手の心を奪ってしまったことを、私は悲しく思っている。彼らの研究は興味深く、洞察力に富み時として貴重だが、あのニヒルな理論的立場は災いだ。カウンター・カルチャーを思い出させる（彼らの多くはそこに原点があるのだろう）。あの運動には私も共感したが、建設的な提案がまったくなかったので、持ちこたえられなかった」（Goldschmidt 1995: 245）。

近年、超大国として復活すると同時に保守化したアメリカで育った次世代の人類学者が、近い将来どのような理論を打ち出してくるかは、こうした社会的背景にも目配りしながら考えるべき問題であろう。

最後に、Gの「ヨーロッパの影」であるが、アメリカの人類学はボアズの時代からポストモダニズムまで、ヨーロッパの大思想の影響を色濃く受けている。ボアズに民族精神の独自性を強調したドイツのヘルダー（Johann Gottfried Herder）の影響が見られることはよく指摘されているし、後進のミードとベネディクトはフロイト（Sigmund Freud）の精神分析に多少傾斜した。構造機能主義は言わずと知れたイギリス経由で、フランスのデュルケムに多くのものを負っている。また、ハリスの文化唯物論にマルクス（Karl Marx）特有の階級論は見られないが、マルクスの下部構造決定論を抜きには語れない。もっとも独創的といわれるギアーツでさえ、ドイツのウェーバー（Max Weber）に影響されている。ポストモダニズム、および本稿で触れ

る余裕のなかったポストコロニアル論が、フーコー（Michel Foucault）をはじめとするフランスの現代思想に大きく依拠していることは言うまでもない。

19世紀中葉、各地で開館した民族学博物館とともに発展したヨーロッパの人類学（民族学）と比べると、アメリカの人類学の歴史はやや浅い。だが今日、アメリカは世界最大の人類学会（American Anthropological Association）を擁し、その研究・教育は質量ともに他を圧倒している。そのいっぽうで、アメリカには常にヨーロッパ（特にイギリス、フランス、ドイツ）の影がつきまとう。アメリカという国の成り立ちがそうであるように、この国の人類学はヨーロッパで生産された大思想を自由闊達に消費して成長し、「知の世界システム」の中心として君臨しているのである。

5. アメリカ的学問の周辺

1993年夏、私は11年間のアメリカ生活に区切りをつけ、帰国の途に着いた。その途中ロサンゼルスに寄って、UCLAでの指導教官エジャトン（Robert Edgerton）に会いに行った。エジャトンは日本ではあまり知られてないが、心理人類学の大家で2004年にはアメリカ人類学会の学会賞（Distinguished Lecture Award）を受賞している。1992年、彼は*Sick Societies*という本を出版し、ボアズ以降の文化相対主義では、明らかに病的な社会や健全な生活を阻害する習慣を判断することはできず、社会成員が被る苦痛をひとつの基準として、世界の社会を「評価」する必要性を訴えた。彼の見解はアメリカでは大きく取り上げられたようだが、私にとって興味深かったのは序章における議論で、そこで彼はラディカルな相対主義（絶対的の真実や普遍的知識の否定など）を唱えるポストモダニストを批判したのである。私はエジャトンの見解に完全に与することはできないが、批判としては見事だったので、どうしてそういうことを私が在学中に言ってくれなかったのか尋ねてみた。すると彼は、私がUCLAにいたときはポストモダニズムが何なのかよく分からなかった、と答えたのである。これには驚いてしまった。というのも、『文化を書く』と『文化批判としての人類学』が刊行された1986年以後の講義で、エジャトンは「あれはファッションだから気にする必要はない」と公言していたからである。また、私が博士論文の一部をナラティブ風に書いて見せたところ、珍しく諫められてしまった。当然、確固たる学問的裏づけと信念に基づいた発言・助言だと思っていたが、どうやらそこまで深く考えた結果ではなかったらしい。

エジャトンが並外れた知性の持ち主であることは、彼の数え切れないほどの著作と

学会賞受賞という偉業が証明している。だが、その彼にして新しい知的潮流が目に入らなかつたということは、単に彼個人の問題ではなく、アメリカ的学問全体の問題ではないかと思う。実際、コースワークを中心とするアメリカの大学院では、特定の分野がカバーする領域すべてにわたって膨大な文献を学生に読ませ、研究者としての基礎を徹底的に叩き込むが、いったん博士号を取得して独り立ちすると、ひとつの領域に閉じこもって新たな思想に無知・無関心になる研究者が多い。この傾向は大都市圏外の *teaching university* (学部生の教育に特化した大学) に著しいが、UCLA のようなアメリカ有数の大学も例外ではない。以下、こうした問題を生む要因について、学問的観点と社会的観点の両方から考察したい。

まず、本を取り巻く社会環境について述べると、アメリカにはニューヨークのような比較的狭い場所に都市の機能が集中している場所を除いて、日本の大型書店に相当する施設が少ない。アメリカの代表的な大型書店として Barnes & Noble があるが、それでも売場に並べられている書籍数は日本に比べれば限られている。その結果、書店を歩き回っていれば得られるはずの情報量が少なく、新たな学問的動きに触れる機会も少ないのである。そもそも、アメリカ人は蔵書好きの日本人と違って、大学の教師でもあまり本を買わずに図書館を利用するので、書店に対する社会的需要が少ない。また、アメリカでは小学校から高校まで教科書は貸与制なので、本を自分のものにしたという欲求が、子供の頃からあまり強くないように思われる。

本を取り巻く第2の社会環境は新聞の書籍広告と書評である。ほとんどの日本の新聞には、1面の一番下にはほぼ毎日と言ってよいほど本や雑誌の宣伝が掲載されるが、アメリカの新聞にそうした広告欄はない。そのため、日本人の目には自然と飛び込んでくる新刊情報が、アメリカでは非常に限定されているのである。日本と比べてアメリカの新聞広告の特徴といえば、地域のデパートの商品（特に女性の下着を含む服）の宣伝が多いということだろうか。書評に関しては日米で大きな違いがある。両国ともに書評が日曜日に掲載されるのは同じだが、日本の場合、新聞の書評は本の簡単な紹介に終始しているのに対して、アメリカの場合、かなり長くて詳しい書評が出る。もっとも、地方紙（アメリカの新聞はほとんどがこれである）で取り上げられる新刊は一般的なものが多いので、知的刺激を得ようと思ったら *New York Times* のような高級紙に頼らざるをえない。だが、すべての地域でこうした高級紙が手に入るわけではなく（インターネットの普及によって状況は改善されたが）、手に入ったとしても格調高い文章で書かれた書評を読むのは一仕事である。つまり、アメリカでは相当の努力と時間を費やさないと、新刊情報を手にすることはできないのである。専門分

野に関する情報ならジャーナルを紐解けば事足りるが、それ以外の分野は新聞の書評に頼る部分が多いので、これは研究者にとって大きなマイナスとなる。

次に学問的環境を考えてみると、アメリカの大学院教育に「タコツボ化」する原因があるように思う。もちろん、総合的に見れば、アメリカの大学院は日本の大学院より優れているが、それなりに欠点もある。特に問題なのは、毎週の課題（reading assignment）があまりにも多いため、学生は自由にものを考える時間と余裕を失い、結果的に教師が決めた枠組みで思考するようになるということだ。たしかに、アメリカの大学院生と比べると日本の大学院生は余裕がありすぎて、それがアメリカ人の目から見れば「退廃」につながるのだが、日本人からすればアメリカ人は自分の考えで本を選び、じっくり読んで友人と討論する時間が少なすぎる⁹⁾。別の言い方をすると、アメリカ人は意外にも教師の要求に対して「素直」で「従順」なのである。反対に、日本の学生は教師を敬っているようで、実は授業を無断欠席したり課題を適当に扱ったりして、日常的に小さな「抵抗」を試みている。私は自分が学生のときはこのように考えなかったが、教師になって講義やゼミを担当してみると、日本の学生はかなり「手ごわい」ことが分かった。逆に、アメリカの学生は教師に対して異論・反論を唱えることも辞さないが、それは教師が設定した枠組みでのことである。結果として、アメリカの研究者は大学院生時代から「思考の自由」を奪われ¹⁰⁾、専門外の新たな潮流に対して無知・無関心となりがちである。

では、「素直」で「従順」なアメリカ人が反旗を翻すとき、彼らはどのような手段に訴えるのだろうか。これはアメリカ社会の権威構造と関連する問題だが、私の観察ではフロイトが解釈したギリシャ神話のエディプス王（Oedipus）のように、「父親殺し」をするようだ。大学教師をはじめとして、アメリカで人の上に立つ者は下の者に対して常に強い圧力をかける。万人の平等を理念とするアメリカ社会では、上位者と下位者が原則としてヨコの糸で繋がっていることで、下が上に対して「身のほど知らず」の態度を取りやすい。そのため、上は下に対して現実の地位の差を思い知らせ、集団内の秩序を守るために強い圧力をかけるのである。つまり、ヨコ（平等）のものをタテ（階層）にする必要があるのだ。そのことは大統領に与えられた強大な権限をみれば一目瞭然であろう。私の知る限り大学も同じであって、学生は教員から、助教授は tenure を持った準教授と正教授から、正教授は学部長から、学部長は学長から、かなりの圧力がかかってくる。こうした権力の構図にあって、下の者が自分の意思を貫くためには「父親殺し」に訴えるしかない。

「父親殺し」がどのような形をとるかは状況によって異なる。大学院生の場合、

もっとも多いのは他の大学に移ることである。つまり、教師との絆を断ち切ることだが、人間関係が手段的 (instrumental) になりやすいアメリカ人にとって、これはさほど感情的に辛いことではない¹¹⁾。プロフェッショナルな研究者の場合、上に述べた権力の構図がもっとも先鋭化するのはジャーナルである。*American Anthropologist* をはじめとするジャーナルの編集長に与えられた権限は強く、それは査読の人選にまず現れる。通したい論文には「甘い」レフリーをあて、落としたい論文には「辛い」レフリーをあてるのは、多くの投稿者が経験的に知っていることである。また、査読の結果が割れた場合、最終的に採否を決定するのは編集長だし、採用後に大幅な修正を指示することもある。もちろん、日本でもこれは同じであろうが、程度が違うのである。アメリカで新しいジャーナルが続々と発刊される背景には、止まることを知らない専門化への対応という理由以外にも、恐らくこうした事情があると思われる。つまり、既存のジャーナルの編集方針では自己表現できない場合、マーカスが初代編集長を務めた *Cultural Anthropology* がそうであったように、いわば「父親殺し」をする形で新たなジャーナルを立ち上げるのである。問題は、そのジャーナルが制度化して独自の規範を持つようになると、分野全体にさらに多くの「タコツボ」ができるということである。

以上、新しい知的潮流に対するアメリカ人の反応が鈍い理由を、社会的観点と学問的観点の双方から手短かに検討した。誤解を避けるため付言すると、これはあくまで一般論であって、世界の一番輝いているところをいち早く取り入れる日本との比較である。たとえば言えば、私にはアメリカの学問はアメリカの大型乗用車のように見える。アメリカを代表する General Motors の大型車は重量感に溢れ、フリーウェイを飛ばしてもまったくぶれない。その安定感は相当なものだが、残念ながら小回りがきかないのである。同様に、アメリカの学問は重厚だが、新しい動きに対して俊敏に対応するのは難しい。日本人がアメリカに留学して人文社会科学を学ぶ際には、こうした傾向を念頭に置くべきだろう。さもないと、アメリカに留学して「時代遅れ」になったという事態が起きかねない。

6. 日本の学問の再評価

日本の大学がさまざまな問題を抱えていることは言うまでもない。しかし、上に述べたアメリカの学問との比較で敢えて好意的に評価すると、次の2点を長所として掲げることができると思う。第1点は「参考書文化」に由来するコンパクトな学問であ

る。高校までの虎の巻や「あんちょこ」の伝統は、高等教育にも受け継がれているようで、たとえば有斐閣の KEYWORD SERIES は、大学院の受験生に非常に人気があるという。同様の解説書や術語集は他の会社からも出版されていて、いずれも売れ行き好調と聞いている。この手の本は見開き 2 ページというレイアウトを採用しているので視覚的にも読みやすく、サッと読んですぐ分かるのが最大の利点である¹²⁾。同じことは日本を代表する事典にも言えて、弘文堂の『文化人類学事典』(縮刷版 1994 年)は、Routledge の *Encyclopedia of Social and Cultural Anthropology* (1996) や Blackwell の *The Dictionary of Anthropology* (1997) より項目数をはるかに多く、解説も簡潔である。また、最近刊行された弘文堂の『文化人類学文献事典』(2004 年)は、基本的文献の他に人類学上の論争もコンパクトに解説してあり、通読すれば分野全体の鳥瞰図が得られるようになってきている。もちろん、後で述べるように、この「軽さ」が日本の学問の問題でもあるのだが——それは英語で *pocket book* と呼ばれる「新書」が、日本ではかなり大きな位置を占めていることに象徴されている——限られた時間で全体を見渡し、知識をアップデートするには優れている。

日本の第 2 の長所は世界の学問への目配りである。たしかに、日本の人文社会科学には独自性が少ない。しかし、「知の世界システム」の中心である英米仏はもちろん、ドイツ語圏やスペイン語圏、さらに近年では中国や韓国の学問にも目を配り、世界の知的潮流を把握しているという点で、日本の学問はインターナショナルである(この「インターナショナル」には、国際空港におけるレストランの分類と同じで、誰の口にも合うが目立った特徴はないという賞賛とも罵倒ともつかない意味も込められている)。日本の研究者が世界の学問の動きに敏感なのは、歴史的に言えば、中華帝国の周辺に位置したという日本の地政学的条件によるものだろう。遣隋使や遣唐使の時代以来、日本のエリートは常に世界のもっとも輝いている文明に憧れ、それを国内で紹介してきた。その伝統は今日も健在で、世界各国の言語で生産された優れた知識を日本人は翻訳し、かつ詳細な解説をつけている。この解説には翻訳された本文以上に価値があるものもあり、読者の理解促進に大いに役立っている。英語圏では他の西洋語圏に比べても翻訳が少ない上に、解説はあったとしても紹介の域を出ないことを考えれば、この点は高く評価に値しよう。また、一例をあげれば岩波書店の「ニュー・ヒストリー」シリーズのように、原著はまったく別の国の出版社から別の構想で刊行され、本来は同居していないはずの複数の書籍が、目利きの編集者によってひとつのシリーズにまとめられ、世界的広がりを持つに至った知の体系を読者にコンパクトに伝えている。

このように考えると、あくまでアメリカとの比較だが、日本で学問を営むことの利点が見えてくる。一言でいえば、それは世界の学問の鳥瞰図を労多くせずして得られる、ということである。当然、長所には短所がつきもので、「浅く」「軽い」のが日本の問題である。しかし、これは国全体の問題なので、一両日には解決しない。そこで、個人としては the best of two worlds (良いとこ取り) を狙って、まず日本で徹底的にブリーフィングをして、ターゲットを定めた上でアメリカ的な「深く」「重い」学問をしたらどうかと思う。そしてタコソボ化したら、再び日本的学問に戻ってオーバーホールし、素早くヴァージョンアップしたらどうだろうか。私自身は UCLA と VCU での経験をもとにそのように努めているし、これからアメリカに留学を考えている大学院生には、ぜひそのように薦めたい。

7. アメリカ留学と日本研究

英米に留学した非西洋人の人類学専攻の学生は、指導教員から自文化を研究するように勧められることが多い。私の場合は自分の意思で日本をフィールドとしたが、人類学は伝統的に《ホーム＝自己＝西洋＝知識生産の場》《フィールド＝他者＝非西洋＝資料収集の場》という二項対立に基づいているので、後者から来た留学生に前者を調査するように勧める教師は、自分自身に他者意識がない限りまづいない。それは、既に英語という外国語で苦勞している留学生に対する思いやりでもあるのだが、外国で自文化を研究するのは予想以上に難しく、それなりのリスクがあることを承知しておくべきだと思う。

その理由を簡潔に述べれば、読者（論文指導教員）の心を打つ民族誌（学位請求論文）を書くためには、まず研究対象となった文化の何が読者にとっておもしろく、そのおもしろいものをどのように書けばよいかという、一見単純そうで実は複雑で難しい問題に直面するからだ。この点に関しては、拙稿「日本人が英語で日本を語るとき」（桑山 2006）に詳しいが、冒頭の「民族誌の三者構造」でも触れたように、同じ日本を研究対象にしても、日本人とアメリカ人では「おもしろい」と感じるものに差がある。日本人留学生がアメリカ人教員にとって「つまらない」ものをテーマに選べば、センスが悪いと思われるかもしれないし、たとえ関心が一致しても、自文化の日本を異文化のアメリカの読者に納得させるように書くには、他者経由での自己表象力（つまりアメリカ人の目で日本を見て描写する力）が求められる。その力をつけるためには、自文化の知識以上に異文化の知識が要求されるし、その要求に応えるために

は長い時間が必要とされる。在米日本人研究者のほぼ一致した見解によれば、言語習得期間を含めて最低5年、概して10年はかかるだろう。私は人類学における自文化研究を強く支持するが、日本人留学生が日本をフィールドとして選ぶときには、既に日本に関する英語の文献が多いだけに、以上のことを十分考慮して決めるべきだと思う。

8. 若い日本の人類学者へのメッセージ

拙著 *Native Anthropology* で、私は、日本の人類学のレベルが非常に高いにもかかわらず、それに見合った世界的評価を受けていないのは、単に言語の壁によるものではなく、「知の世界システム」における力の不均衡に原因があると論じた。この「世界システム」の中心にはアメリカとイギリス、そして近年では多少影響力に陰りの見えるフランスが位置し、その他の国は日本やヨーロッパの小国を含めて周辺に追いやられている。中心の研究者は周辺の学問を無視してもキャリアを損ねることはないが、周辺の研究者は中心の動向に常に注意を払い、そこで生産された理論や方法論を熱心に学んでいる。後者が国際的に認められるためには、前者の体系と言語を使って自己表現する必要があり、その自己表現も中心の基準によって評価される。こうした状況下では、中心と周辺の学者が対等に話すことは難しく、中心は周辺に対して覇権を握ることになる。「人類学の世界システム」は異文化に関する知識の生産・流通・消費にまつわる政治を規定し、周辺の声を中心（および他の周辺）に届きにくくなるような構造を生み出す。

私のこうした議論には異論もあり、たとえばオランダのファン＝ブレーメン (Jan van Bremen) は、東南アジア研究における日本の存在を評価して、はたして日本が周辺かどうか疑問視している (van Bremen 1997)。たしかに、日本は英米仏という中心に対して周辺であるが、アジアという周辺に対しては中心である。その意味で、日本を「半周辺」または「半中心」と呼ぶこともできるだろうが、私には、それはアパルトヘイトにおける名誉白人のように思われ、むしろ「知の世界システム」における権力関係を隠蔽してしまうのではないかと危惧する。日本の人類学者は国内で発表する機会に恵まれているので、国際的ジャーナル（現実には英米系のジャーナル）に投稿したり、海外の出版社と交渉したりすることが少ないようだ。そのためか、「知の世界システム」における日本の不利を十分認識しているとは言い難く、変革に必要なマイノリティ意識も希薄のように思われる。だが、「世界システム」の中心で学んだ多

くの人が実感しているように、日本は日本人が考えている以上に周縁的存在で、自分たちの声は通りにくい。

私を含む戦後生まれの中堅日本人研究者は、先達の努力によって比較的良い条件で学問を始めることができた。東京外国語大学の大学院生時代、とある先生から、本さえない戦後の焼け野原に呆然と立ち尽くし、不退転の決意をもって学問を志した、という迫真の話聞いた。また、アメリカから帰国した後、もう少し年配の先生からは、学徒出陣式で東条英機首相の演説を聞いてから戦地に赴き、命からがら日本に引き上げてきたという、とても涙なしには聞けない話も聞いた。彼らは私の父と同世代であるが、そうした人々の努力があったからこそ、私が育った「平和ボケ」の日本があったのだろう。その「平和ボケ」の時代に、私は幸運にもフルブライト奨学生としてアメリカに渡り、思う存分勉強することができた。人類学に限っていえば、私が学部生の1970年代前半には、専門科目として人類学を講義する大学は少なかったが（東京外国語大学では非常勤講師が入門を担当していた）、その後は多くの大学に専門家が配置されて今日に至っている。また、1977年に開館した国立民族学博物館は、世界的な人類学の拠点のひとつに成長したし、さらに遡っていえば、1934年設立の日本文化人類学会（旧称：日本民族学会）は、今日会員数が2000人を超え、アメリカ人類学会に次いで世界第2の規模を誇っている。こうした好条件を所与として出発した若い日本の人類学者は、日本的に言えば「先達の恩」にどのように報い、アメリカ的に言えば何に向かって新たに「チャレンジ」すべきであろうか。

当然、これは個々の研究者が考えるべき問題だが、私の願いとしては、世界における日本（ひいては東アジア）の人類学の地位向上を、ひとつの重要課題として考えてほしい。そのためには、繰り返すようだが、まず現在の日本の周縁的地位を自覚して、留学などによって「世界システム」の中心に直接触れ、中心に集まるさまざまな周縁の人とも対話して、日本がより大きな世界で置かれた状況を把握した上で、現実的な戦略を立てる必要があるだろう。私が不思議に思うのは、人類学者は現場を重視してフィールドワークを必須としているのに、自分が依拠している知の生産の現場をあまり見ようとはしないことだ。日本の人類学者が海外に赴くとき、通常、行き先は研究対象の民族が住んでいる場所であって、自分が使っている理論や方法論が生み出された現場（現実には英米仏の3国）ではない。それでは、完成されたバイオリンを楽器店のショーウィンドーで眺めているようなもので、それを弾いて綺麗な音を出すことはできるだろうが、バイオリンを作れるようにはならない。やはり楽器工房に弟子入りする必要があるのだ。この意味で、日本を含む周縁の人類学者には、通常のフィー

ルドワークのほかに、「フィールドワークとしての留学」が要求されるだろう。

最後に2つのことを付け加えて結びとしたい。まず、以上の発言は、英米仏の3国以外に留学する価値はない、ということの意味しない。本論の冒頭で述べたように、最近ではアジアに留学を希望する学生が増えており、実現すれば、明治以降、欧米一辺倒だった日本人の世界観に多様性をもたらすだろう。ただ、ひとつ気をつけなければいけないのは、留学生を受け入れるような主要な大学の教員は、世界中どこでも欧米、特に英米仏で学位を取ったエリートが多いという事実である。たとえば、韓国のソウル大学人類学部の教員の多くは、英語圏で博士号を取得している。実際、私が2003年春に1週間ほど訪れたときの「公用語」は英語だったし、お互い英米の学問に通じているからこそ、コミュニケーションできたのであった。特に、教員の1人はUCLAの出身で、私とは多少面識があったので昔話に花が咲いたほどである。こうした現象の背後には、「世界システム」の周辺は中心との関係構築に熱心なあまり、周辺同士の関係は日本と韓国のように隣国であっても驚くほど薄く、たとえコミュニケーションが成立したとしても、それは中心経由のことが多いという現実がある。同様のことは日本のアジア人留学生にも言え、日本語は達者なのに英語の文献が読めないために、研究者の道が閉ざされる場合がある。

付け加えるべきもう1点は、「世界システム」の中心への留学は、「本場」の学問を肌で知ること自体が目的ではないということである。ただ「本場」で学んで故郷に錦を飾るだけなら、それはかつての洋行となんら変わらないし、せいぜい先方の優れた研究の解説者となるだけである。そもそも、そういう留学は国内の目を意識したものであって、国際的インパクトは事実上皆無なのである。反対に、私がこれからの世代の研究者に望みたいことは、「世界システム」の中心で学んだことを日本のコンテキストで考え直し、日本の周辺性を利用して中心の意識から抜けたものを掬い上げ、新たな構想のもとに再提示することである。これまで、日本の研究者は何度となく中心の理論を練り直してきたが、中心に対して再提示する（つまりボールを相手のコートに打ち返す）ことは稀であった。私の提案はポストコロニアル的戦略といってよく、台湾のチェン（Kuan-Hsing Chen）の次の言葉と対応する。「植民地の支配者は被支配者に軽蔑のまなざしを向けるだろう。しかし、被支配者は支配者の言語を使って、禁止された知識と伝統を支配的言説空間に忍び込ませることができる。そして、支配者は再提示された文化的コード全体に不慣れなため危機に陥り、権威を喪失するのである」（Chen 1998: 23）。

だが、この一見抜け目ない戦略には、ひとつの根本的弱点がある。それは、支配者

の意識から抜けたものを掬い上げ、権力を持つ他者の言葉を使って自己の知識と伝統を忍び込ます限り、被支配者は支配者が決定した枠組みでしか独自性を主張できないということである。そのため、支配者との関係で構築された（つまり彼らから見た）独自性を強調すればするほど、実は支配者の枠組みを強化するという悪循環に陥ってしまうのである。これは宗主国と植民地の間に典型的に見られる関係で、植民地が「相違の権利」を主張するためには、宗主国が理解できる言葉で語らねばならず、それは結果として強者の世界に加担するというジレンマを生む（桑山 2004b: 254）。

本論のもととなった研究会報告では、このジレンマを次のような比喩で説明した。誰もいないテニスコートで、好き勝手にボールを打ち込んでいたイギリスの貴公子の前に、ある日、突如として有色の男が現れて試合をのぞみ、これまで見たこともないような球を打ってきた。貴公子は慌てて応戦したが、男の球はあまりに変則的なので対応できず、ついに負けてしまった。その後、男は数々の名選手を打ち破り、ウィンブルトンで優勝した。一見、有色男の完璧な勝利のように見えるが、実はそうではない。なぜなら、男はテニスというヨーロッパの貴族に愛され、19世紀後半のアメリカでルール化された競技に勝ったというだけで、新たな競技は生み出さなかったからである。むしろ、彼が勝つことによって同胞を勇気づけ、その結果テニスという西欧産の競技を世界に広め、さらに西欧的秩序を拡大してしまったとも言える¹³⁾。その意味で、彼は変革者（見ようによっては共犯者）ではあったが、革命家ではなかった。

では、「知の世界システム」の周辺に置かれた日本に、集団として革命を起こす力があるだろうか。私が見聞する限り答えは否である。残念ながら、今の日本および他の周辺諸国（特に非西洋）には、そこまでの力はないと思う。ただ、日本にはシステムを変革するくらいの力量を備えた人類学者はこれまでもいたし、今日、より多く輩出されつつある。これからの世代の研究者はそうした人物に見習い、かつ偏狭なナショナリズムに陥ることなく、世界の研究者から基礎文献と目されるような業績を、ひとつでも多くあげることを願ってやまない。

注

- 1) この経歴からも分かるように、私は人類学を日本で正式に勉強していない。ただ、東京外国語大学大学院では非常勤の鈴木二郎氏（東京都立大学名誉教授）に社会人類学を教わり、大学付属のアジアアフリカ言語文化研究所の飯島茂氏（東京工業大学名誉教授）にも教えを受けた。1993年に日本に帰国してから、私は日本を母国というよりは外国だと思って、日本の人類学および人類学界に溶け込むように努めた。なお、フルブライトの同期生には竹沢泰子氏（京都大学人文科学研究所教授）がいる。
- 2) さらに、南北戦争における南軍の首都リッチモンドで、非白人しかも外国人の私が教壇に

立つのも辛かった。VCUでの教員生活についてはエッセイを發表しているのので (Kuwayama 1998)、関心のある方はそちらをご覧ください。

- 3) ここでいう「日本的な考え方」とは、きわめて日常的なものである。ひとつ印象深い例をあげると、ある日、小学生になった息子が帰宅したとき、私はなにげなく「手を洗ってうがいをしてください」と言った。すると、息子は怪訝そうな顔をして自分の手を見て、「汚くないから洗わなくていい」とこたえた。日本で育った子供なら、このような反応はまず示さないだろう。実は、この何気ない会話(たしか日本語)には、重要な文化的意味が隠されている。というのも、通常、日本人は帰宅後の手洗いとうがいを衛生の問題だと考えているが、それはむしろ日本人のウチとソトの厳格な区分と関係しており、ソトからウチへ移行する際の通過儀礼として理解できるからだ。実際、私の息子が幼くして「見破った」ように、ソトがウチより汚いという科学的根拠はない。また、日本人の手洗いとうがいの指導は、外出から帰宅したときにほぼ限定されており、自宅圏外のソト(たとえば公道)からウチ(たとえばデパート)に入ったとき、同じように言う人はまずいない。つまり、帰宅したら手を洗ってうがいをするという日本人の行為は、「鬼はソト、福はウチ」と同じ発想であって、《ソト=危険・不潔》《ウチ=安全・清潔》という象徴的秩序を体現しているのである。神社の境内に入るとき、「穢れ」を落とすために水を使うのと似ている。問題は、人類学者にとって貴重なこうした体験も、それがフィールドではなく子育ての場で頻発すると、親は疲れてしまうということなのである。異文化で家族揃って「平和に」暮らすためには、親が文化的に鈍感であったほうが良いかもしれない。
- 4) このときは、オックスフォード大学の中でも格式の高い All Souls College の fellow で宗教社会学者ウィルソン氏 (Brian Wilson) に、大学を存分に案内してもらった。特に印象深かったのは、College内で開かれた high table である。私は主賓級の扱いを受け、一番高い席に座らされた。後で聞いたことだが、その席は同日の昼食会でエリザベス女王の母が座った席だった。なお、All Souls College はエヴァンズ=プリチャード (E. E. Evans-Pritchard) がいた所で、彼は晩年寂しさを紛らすために酒びりになったという話を、他の fellow から聞いた。
- 5) アメリカでは教授が学生を誘って授業後に一杯飲みに行くようなことはあまりない。ニューヨークのような大都会を除いて、公共交通機関があまり発達していない(つまり飲酒後に車を運転しなければならない)のが大きな原因だろうが、それ以外にも、禁酒法の伝統や人間関係の希薄さが関係していると思われる。概して、アメリカの学生が教授と1対1で話す機会はオフィスアワーに限られ(そのために前々からアポイントメントを取っておかなければならない)、その際にも教授はできるだけ個人的なことに立ち入らないようにする。ちなみに、Oxford Brookes University には、キャンパス内にパブのような施設があり、昼間から薄暗い部屋で学生がビールを飲んでいた。さらに、隣接の student store には安売りのワインが置いてあったが、アメリカではまず考えられない光景である。
- 6) アメリカの教科書が妖術 (witchcraft) の事例として好んで取り上げるのは、エヴァンズ=プリチャードのアザンデ族ではなく、クラックホーン (Clyde Kluckhohn) のナヴァホ族である。クラックホーンには *Navaho Witchcraft* (1944) という著作があり、彼は妖術には精神分析学でいう「防衛」機能があると主張した。また、心理人類学の泰斗スパイロー (Melford Spiro) も、宗教を「文化的に構築された防衛メカニズム」と見なしている。
- 7) 人間は自己と他者を差異化したがる。アメリカは民主主義を旗印に人間の平等を理念としているので、その裏腹として、現実生活ではもっとも可視的な2つの指標——金(経済階層)と肌の色(人種)——によって自他を差異化する傾向が強い。逆に、比較的開かれた階級社会である今日のイギリスでは、階級が人種という境界を越える傾向がある(大学の教師は獲得的階級としては上位に属する)。アメリカの人種主義は「階級なき社会」(classless society)の裏面といえよう。
- 8) 拙著 *Native Anthropology* (2004) で、私は英米仏の学者は「人類学の世界システム」の中心に位置しており、周辺の研究に無関心でもキャリアを損なわないと論じた。この傾向は特にアメリカに著しく、彼らはフランスに対しても同様な態度をとることがある。レヴィ=ストロースが1980年代半ばUCLAを訪れたとき、大学最大のホール (Royce Hall) は聴衆で完全に埋まったが、どちらかというと有名な見物客に似た人が多く、『源氏物語』に触れた彼の講演が本当に理解されたかどうかは分からない。
- 9) アメリカには日本の「喫茶店文化」やフランスの「カフェ文化」に相当するものがないので、街に繰り出してコーヒーでも飲みながら仲間と討論する機会が少ない。
- 10) アメリカ人はアメリカにこそ思想の自由があると確信しているので、こうした発言には反

- 感を覚えるであろう。だが、本当に思想の自由があるなら、なぜアメリカには社会主義や共産主義が事実上ないのだろうか。歴史的に深い関係にある西ヨーロッパと比べると、アメリカの政治的単一性は顕著である。実は、こうした問題は既に19世紀に、フランスのトクヴィル (Alexis de Tocqueville) が名著『アメリカの民主政治』で論じていた。
- 11) 逆に言うと、精神的独立 (たとえ建前であっても) を大切にするアメリカ人は、最初から別れを想定してあまり密接な関係を作らないようにする。UCLA のジョンソンは、この態度を *fear of intimacy* (親密さの恐怖) と表現していた。
 - 12) 見開き2ページのレイアウトは、各ページに記事を取める日本の新聞紙面と関連しているようだ (アメリカの新聞記事は何ページにも渡って掲載される)。なお、韓国の李御寧は、『縮み』志向の日本人 (1984年) という名著で、日本文化の特徴は広大な宇宙を自己に引き寄せて小さく再現することだと述べた。その例として盆栽や仏壇をあげているが、新書やキーワード集なども「縮み」の例といえよう。李の本は *The Compact Culture* (1991) として英訳された。
 - 13) 同じことは日本の相撲にも言える。横綱や大関が外国人で占められるようになった今日、「国技の危機」を叫ぶ人は多い。だが、外国人力士は基本的に日本の伝統とルールにのって勝負しているのである。たとえ母国の技を時として忍び込ませることがあっても、相撲がレスリングに取って代わられたわけではない。むしろ、彼らの活躍が母国に伝えられて後につぐ者が出れば出るほど、日本の世界は拡大していく。

文 献

- Barfield, Thomas (ed.)
1997 *The Dictionary of Anthropology*. Oxford: Blackwell Publishing.
- Barnard, Alan and Jonathan Spencer (eds.)
1996 *Encyclopedia of Social and Cultural Anthropology*. London: Routledge.
- Chen, Kuan-Hsing (ed.)
1998 *Trajectories: Inter-Asia Cultural Studies*. London: Routledge.
- Clifford, James and George Marcus (eds.)
1986 *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*. Berkeley: University of California Press (春日直樹ほか訳『文化を書く』東京: 紀伊國屋書店, 1996)
- De Tocqueville, Alexis
1969 *Democracy in America* (translated by George Lawrence). New York: Doubleday. (井伊玄太郎訳『アメリカの民主政治』東京: 講談社, 1987)
- Douglas, Mary
1966 *Purity and Danger: An Analysis of the Concepts of Pollution and Taboo*. Harmondsworth: Penguin. (塚本利明訳『汚穢と禁忌』東京: 思潮社, 1985)
- Durkheim, Emile and Marcel Mauss
1963 *Primitive Classification* (translated, with an introduction, by Rodney Needham). London: Cohen & West. (山口貴美夫訳『人類と論理: 分類の原初的諸形態』東京: せりか書房, 1969)
- Edgerton, Robert
1992 *Sick Societies: Challenging the Myth of Primitive Harmony*. New York: Free Press.
- Embree, John F.
1939 *Suye Mura: A Japanese Village*. Chicago: University of Chicago Press. (植村元覚訳『日本の村落社会: 須恵村』東京: 関書院, 1955)
- Geertz, Clifford
1973 *The Interpretation of Cultures: Selected Essays*. New York: Basic Books. (吉田禎吾ほか訳『文化の解釈学』東京: 岩波書店, 1987)
- Goldschmidt, Walter
1995 'An Open Letter to Melford E. Spiro.' *Ethos*, Vol. 23 (2): 244–254.
- Harris, Marvin and Orna Johnson
2002 *Cultural Anthropology* (6th ed.). Boston: Allyn & Bacon.

- Hendry, Joy
1986 *Becoming Japanese: The World of the Pre-School Child*. Manchester: Manchester University Press.
1999 *An Introduction to Social Anthropology: Other People's Worlds*. London: Macmillan. (桑山敬己訳『社会人類学入門』法政大学出版局, 2002年)
- Hernstein, Richard J. and Charles A. Murray
1995 *The Bell Curve: Intelligence and Class Structure in American Life*. New York: Free Press.
李御寧(イー・オリオン)
1984 『縮み』志向の日本人』東京: 学生社 (*The Compact Culture: The Japanese Tradition of 'Smaller Is Better.'* Translated by Robert N. Huey. Tokyo: Kodansha International)
- 石川栄吉ほか編
1994 『文化人類学事典(縮刷版)』東京: 弘文堂。
- Kluckhohn, Clyde
1944 *Navaho Witchcraft*. Boston: Beacon Press.
- 小松和彦ほか編
2004 『文化人類学文献事典』東京: 弘文堂。
- Kondo, Dorinne K.
1990 *Crafting Selves: Power, Gender, and Discourses in a Japanese Workplace*. Chicago: University of Chicago Press.
- Kroeber, Alfred L.
1917 'The Superorganic.' *American Anthropologist* 19: 163-213.
- Kuwayama, Takami
1989 *The Japanese Conception of Self: The Dynamics of Autonomy and Heteronomy* (Ph. D. thesis, UCLA). Ann Arbor, Michigan: University Microfilms International.
1998 'An Asian Anthropologist in the United States of America: An Autobiography.' *Sociologica*, Vol. 23 (1): 77-106.
2004 *Native Anthropology: The Japanese Challenge to Western Academic Hegemony*. Melbourne: Trans Pacific Press.
- 桑山敬己
2001 「アメリカ文化人類学教科書の内容分析: 1990年代前半からの変化を中心に」『国立民族学博物館研究報告』25(3): 344-384.
2004a 「文化人類学」小田隆裕ほか編『事典現代のアメリカ』pp. 392-399, 東京: 大修館書店。
2004b 「大正の家族と文化ナショナリズム」季武嘉也編『大正社会と改造の潮流』(日本の時代史24), pp. 222-257. 東京: 吉川弘文館。
2006 「日本人が英語で日本を語るとき: 『民族誌の三者構造』における読者/聴衆について」『文化人類学』71-2: 244-266.
- Langness, L. L.
1974 *The Study of Culture*. Navato, California: Chandler & Sharp Publishers.
- Leach, Edmund
1976 *Culture & Communication: The Logic by which Symbols Are Connected: An Introduction to the Use of Structuralist Analysis in Social Anthropology*. Cambridge: Cambridge University Press. (青木保, 宮内敬造訳『文化とコミュニケーション: 構造人類学入門』東京: 紀伊國屋書店, 1981)
- Lienhardt, Godfrey
1961 *Divinity and Experience: The Religion of Dinka*. Oxford: Clarendon.
- Marcus, George and Michael Fischer
1986 *Anthropology as Cultural Critique: An Experimental Moment in the Human Sciences*. Chicago: University of Chicago Press. (永渕康之訳『文化批判としての人類学: 人間科学における実験的試み』東京: 紀伊國屋書店, 1989)
- Rappaport, Roy
1967 *Pigs for the Ancestors: Ritual in the Ecology of a New Guinea People*. New Haven: Yale University Press.
- Said, Edward

- 1978 *Orientalism*. New York: Pantheon Books. (今沢紀子訳『オリエンタリズム』東京：平凡社, 1986)
- Sapir, Edward
1985 *Selected Writings in Language, Culture and Personality* (edited by David G. Mandelbaum). Berkeley: University of California Press. Orig., 1949.
- Van Bremen, Jan
1997 'Promoters Who Do Not Appear on the Stage: Japanese Anthropology and Japanese Studies in American and European Anthropology.' *Japan Anthropology Workshop Newsletter* 26/27, pp. 57-65.
- Whorf, Benjamin
1965 *Language, Thought, and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf* (edited by John B. Carroll), Massachusetts: The M. I. T. Press. Orig., 1956 (池上嘉彦訳『言語・思考・現実：ウオーフ言語論選集』東京：弘文堂, 1978)